

鹿児島大学時代

「10歳代の米澤傑」の最後に、「高校2年生の時の“人生の将来をも決める「九州方面の修学旅行」”について述べています。修学旅行の3日目は鹿児島での名勝庭園「仙巖園（通称“磯庭園”）」のすぐ南隣にあった「水明山荘」という旅館に泊まり、翌朝は早起きをして、桜島から登る朝日を見て大変大きな印象を受けました。今でも、その光景が目には浮かび上がります。まさに、これで、私の鹿児島大学への進学が決まった訳で、人生の大きな分岐点であったこととなります。とは申しましても、この修学旅行の時に、鹿児島大学を受験しようと思った訳ではなく、以下のような経緯によります。

既に「故郷の鳴門」の中で述べていますように、私の幼少児期の性格形成の根本であった祖母の死が、私の「医学」への道の深層心理的基礎となり、敬愛する叔父が自分の将来について「研究」を考えていたことが“医学研究への憧れ”になり、高校時代には、医学部受験をすることに決めていました。（表向きには、そのような立派な計画性があったとも言えますが、大学進学に関して、もっと大きな部分を締めます、私自身の心内の客観的分析をした場合、完全に“文系”ではないし、とは言え、「理学部」や「工学部」に進学するほどの“理系”でもなかったことから、敢えて申し上げれば、“文系”でも“理系”でもない「医学部進学」を決めたというのが『真実』です。）

私どもの大学受験の頃は、国立大学受験に関しては「一期校」と「二期校」といった種類分けがなされていました。「一期校」受験は、徳島からも近い京都大学医学部を受験しましたが見事に不合格となり、さて、「二期校」受験を考えた場合、西日本の「二期校」で医学部があるのは、山口大学と鹿児島大学のみでした。そのどちらを受験するかに大きな影響を与えたのが、高校2年生の修学旅行で見た“桜島から登る朝日”であった訳で、迷わず、鹿児島大学医学部を受験し、幸運にも合格できました。

入学式には、学校の教員で忙しくしていた両親に代わり、幼少児期からよく可愛がってくれていた祖父への“恩返し”も兼ねて、祖父と一緒に鹿児島へ参りました。余裕を持って鹿児島入りをして、入学式前には温泉旅行等の観光を堪能し、十分な「祖父孝行」が出来ました。鹿児島県体育会館での入学式が終わった後、祖父に、入学式の感想を聞いてみましたところ、全会場を眺め渡すことが出来る特等席に座っていた・・・とのこと。後で、調べて見ましたら、なんと「名誉教授席」の一番前に座っていたことが判りました。祖父の周りの名誉教授達は、どこの学部の名誉教授かな・・・くらいは思ったかも知れませんが、「名誉教授席」に座っている人物は身分証明を求められる訳でもなく、祖父は、まさに特等席で鹿児島大学入学式を楽しんだこととなります。

入学式が終わった後、鹿児島大学キャンパスへ行き、正門をくぐったところでは、沢山の部活動の入部勧誘が行われており、私は、正門をくぐった直後に、男声合唱団の「グリークラブ」から勧誘を受け、中学時代からずっと歌って来ていたので、即、入部を決めました。後で判ったことですが、鹿児島大学には、もう一つの大きな男声合唱団の「フロイデコール」があり、「グリークラブ」は「フロイデコール」の運営に不満を持った部員が数年前に“暖簾分け”をしてつくったものであることを知りました。まあ、私は、そのようなことはどうでも良く、ただ、歌が唄えればよかったので、「グリークラブ」の練習に熱心に通っていたのですが、音量の大きな私の歌声がどうしても飛び出してしまい、指揮者から、歌声のボリュームを抑えるように注意されることで、とても居心地が悪く、しょっちゅう「退部したい」旨を伝えていましたが、合唱の中で「ソロ」をさせてやるから・・・というように、先輩から宥められながら1年間は「グリークラブ」に在籍し、1年間の活動の集大成としての「定期演奏会」では、アンコールでの「カリソカ」で、先輩を差し置き、ソロ

を歌わせてもらいました。ただ、その「定期演奏会」の直後に、「グリークラブ」が「フロイデコール」に合併することになり、まさに、私がソロを歌った「カリンカ」で「グリークラブ」の幕が閉じたこととなります。「グリークラブ」のほとんどの部員は「フロイデコール」へ移りましたが、私は、この際と思って、合唱団には別れを告げ「独唱」に力を入れることにしました。医学部といっても、教養時代に、私は、取得できる単位の全ての116単位を取得しましたが、それでも、時間は有り余り、空き時間には、しょっちゅう教養キャンパスのすぐ隣にある教育学部音楽科のピアノ室に行き、発声練習をしていました。さらに、「グリークラブ」の先輩に尋ねて、私と同学年の頃で、最もピアノ演奏の腕の良いピアニストを教えてください、厚かましくも、そのピアニストに歌のピアノ伴奏を頼んでいました。もともと厚かましい私は、レッスン料をお支払いすることもなく、全くとのご好意に頼っていました。大学2年生の時にピアノ伴奏を頼んでいたのが、妻の悦子です。悦子・・・その頃は、「原口悦子」さんで、しょっちゅうピアノ伴奏を頼んでいたうちに、コーヒーと一緒に飲みに行くことから始まり、“お付き合い”をするようになり、そのうち、私が医学部を卒業して医師免許を取得したら結婚してください、とプロポーズをしました。その頃、“悦子さん”にはお見合いのお話があり、相当な段階まで進んでいたのですが、私がそのお話を壊してしまった、ということになります。“悦子さん”も、私のプロポーズを受け入れてくれまして、二人の間では、私に医学部卒業後に結婚と決めていたのですが、そのことを双方の両親に話しましてところ、双方の両親とも「もう、結婚することを決めているのであれば、早い方が良い」との意見で、「経済的な援助はするから、直ぐに、結婚しなさい」ということで、私が医学部3年生の11月に結婚式を挙げるという「学生結婚」をいたしました。そのようなことで、昨年11月2日には、もう「金婚式」ということになりました。

全ての面で厚かましい私は、小さなピアノ室だけでなく、教育学部音楽科で最も大きくグランドピアノにある音楽室で練習をしていましたところ、クラリネットの先生が走り込んで来られ、すっかり、大目玉をいただくという覚悟を決めたのですが、なんと、その先生がおっしゃいますには「貴方はとても素晴らし声を持っているから、正式に声楽のレッスンを受けなさい」とのことで、まるで、拉致されるようにその先生の車に乗せられ、当時、鹿児島短期大学の声楽教授でいらした有名なテノール歌手の板橋勝先生のところ連れて行かれ、その場で、板橋先生の前で歌いましたところ、板橋先生からも大変なお褒めを賜り、即、弟子入りすることになり、正式に声楽のレッスンを受けることになりました。そのことが、私の声楽テクニックの基礎となり、だんだんと、演奏会で「独唱」を歌う機会も出来るようになりました。

私は、「南日本音楽コンクール」を、大学5年生の時と、医師になってから3年目の2回受けましたが、予選は通過したものの、2回とも「入賞」はおろか「入選」も出来ておりません。2回目の挑戦の際に、南日本新聞の発表で「落選」が判ったその日に、審査員のお一人のソプラノ歌手から、大学病院に電話があり、ご自分がオペラ「マダム・バタフライ」の全幕で、蝶々夫人を演じるから、私にピンカートンを演じて貰えないか、というものでした。即、「私は、南日本音楽コンクールで入選さえ出来てないのですが・・・」と申し上げますと、「いやいや、貴方の声は素晴らしいから」とのことで、“じゃあ、何で入選さえさせて貰えなかったのですか？”と尋ねてみたかったのですが、グッと堪えました。私は、審査員長も含めて、審査員のどなたにもレッスンを受けていませんでした。また、審査員長が会長を勤めていた「鹿児島オペラ協会」からも、お誘いは受けたのですが、医師という仕事をしていては定期的に舞台稽古等に行けない、ということでお断りをしましたようなこともあり、審査員長のお気に入りでなかった・・・というのが、入選さえ出来なかった理由かも知れません。

結局、審査員のお一人のソプラノ歌手からのお誘いを受け、オペラ「マダム・バタフライ」の全幕で、ピンカートンを無事に歌い演じることが出来ました。その後、オペラ「カルメン」のドン・ホセ役も演じました。ただ、「南日本音楽コンクール」で入選さえ出来ていないというのでは、まさに“無冠の帝王”という状態ですので、思い切って、プロ歌手も対象とした全国レベルのコンクールを受け、日本クラシック音楽コンクール声楽部門第1位、ならびに、全部門でのグランプリ獲得、太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ優勝という「最高位」を得ることができ、やっと「南日本音楽コンクール」による“引け目”を克服することが出来ました。

「音楽」のことばかり書いて来ましたが、「医学」の勉強も一生懸命に致しまして、卒業する時には、「首席」で卒業し、卒業式では、総代で「卒業証書」を受け取る役目を致しました。卒業式には、両親が休暇をとって鹿児島に参りまして、妻の悦子、悦子の両親と共に、私の「以上“総代”」を見届けてくれまして、何よりの親孝行が出来ました。

(2022年7月19日記)